

今回から「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです

何をなすべきかの目標を持ち、使命感を持って、みんなが一致団結するところに成果がある。

(松下電器産業〈現・パナソニック〉創業者 松下幸之助)

1932 年(昭和 7 年)5 月 5 日。大阪・堂島の中央電気倶楽部で、松下電器製作所の「第 1 回創業記念式」が開催された。創業者の松下幸之助は、集まった 168 人の社員に対して、産業人の使命について熱っぽく語りかけた。「産業人の使命は貧乏の克服である。そのためには、物資の生産性につぐ生産をもって、富を増大させなければならない。水道の水は加工され価値あるものであるが、通行人が飲んでもとがめられない。それは量が多く、価格があまりにも安いからである。産業人の使命も、水道の水のごとく物資を豊富にかつ廉価に生産提供することである。それによって、この世から貧乏を克服し、人々に幸福をもたらし、楽土を建設することができる。松下電器の真の使命もまたそこにある。」これは、後年、「水道哲学」と呼ばれ、幸之助の経営理念の原点となった。幸之助が社名を「松下電気器具製作所」と定めて改良ソケットの生産を開始するのは、1918 年(大正 7 年)3 月 7 日。創業から 14 年も経過して「第 1 回創業記念式」というのも、おかしな話ではなかったが、そこには幸之助の熱い思いがあった。幸之助は産業人の真の使命を知っていたという意味で、この年を「創業命知」元年とし、5 月 5 日を松下電器創業記念日とした。「うちの創業は日は昭和 7 年 5 月 5 日」と言ってはばからなかった。「水道哲学」の意義について、幸之助は後年、「一言でいえば、経営に魂が入った」と述べている。これは、どういう意味か。当時の社会情勢と無関係ではない。1930 年(昭和 5 年)に昭和恐慌が起こり巷には失業者が溢れていた。極度の就職難で、「大学をでたけれど・・・」が流行語になった時代である。国民の苦しみを尻目に、財閥や大企業はドル買いを行い巨利を貪っていると非難・攻撃された。松下電器が創業記念式を行った 1933 年には、3 月に三井財閥の総帥、三井合名理事長の團拓磨が殺され、5 月に犬養毅首相が暗殺される 5・15 事件が起きている。世の中の動きに敏感な幸之助がこれらの出来事に無関心だったはずはない。急激な政治的・社会的変化が起こり、殺伐とした世情の中、幸之助は同年 3 月に運命的な出会いをする。彼は信者ではなかったが、天理教の信者の知人に誘われて奈良県天理市の天理教本部を訪れ、天理教教祖の中山みきの没後 50 年、立教 100 年を記念した昭和普請の現場に立ち会った。この普請現場で働く人々の姿を目の当たりにして、幸之助は衝撃を受けた。幸之助の心を打ったのは、信者たちが教祖殿の建築のために、黙々としかも喜びに満ちた表情で働いている姿だった。物欲を満たすわけでもないのに、信者たちはあんなに一生懸命、奉仕作業をしている。給料をもらえとか、偉くなれるといった欲ではない。彼らを支えている本当の意味での生きがいはなんだろう。使命感があるに違いない。ひるがえって、松下電器の使命とは何か。幸之助は帰途、さらに帰宅してからも思い悩んだ。深夜になって、脳裏に夏の日の記憶がよみがえってきた。事業を始め間もないころ、大阪の天王寺界限を通りかかったときのことだ。脳天に稲妻が走った。幸之助は、このとき、松下電器の目指すべき使命について啓示を得たのである。使命を感得した幸之助は、これを従業員に伝えられずにはいられなかった。これが「第 1 回創業記念式」を開いた理由だ。このとき、幸之助は、後々、神話として語り継がれることになる「水道哲学」と呼ばれる産業人の使命について語った。

幸之助の後々神話として語り継がれる事になった哲学は何ですか？

()

その哲学の意義について、幸之助は後年何と述べていましたか？

()